

Guy de Chauliac の Chirurgia magna における歯科学的記述補遺

市川博保

東京都

A Supplement to the Articles of Dentistry in Guy de Chauliac's Chirurgia magna

HIROYASU ICHIKAWA

Tokyo

Summary

Previously, I wrote about the articles of dentistry in Guy de Chauliac's Chirurgia magna. At the time I used Guerini's writing, a part of which he cited from Édouard Nicaise's annotated book, Chirurgia magna.

Recently, I read Nicaise's book, so I include this as a supplement to my paper.

Supplement-heads are as follows,

1. Bibliography of Guy de Chauliac gathered by Nicaise.
2. Study of dental instrument inserted in Nicaise's book.
3. Names and times of classic medical writers cited in Chirurgia magna written in Nicaise's book.

緒 言

筆者は、さきに14世紀の最も著明な外科医 Guy de Chauliac の著作といわれる Chirurgia magna における歯科学的記述について報告した¹⁾。それは、Laurent Joubert が新たに編纂したラテン語による Chirurgia magna (1585年刊) の中の歯科学的記述と²⁾、Vincenzo Guerini が彼の歯科医学史 (1909年刊)³⁾に、Chirurgia magna の決定版といわれる Édouard Nicaise によるフランス語の注釈書 (1890年刊)⁴⁾から引用した歯科学的記述とを比較検討したものである。しかし、筆者はその

時にはまだ Nicaise の注釈書を手にしていなかったが、このたび、その注釈書を披見する機会を得、前論文に追加すべき知見を認めたので、補遺とするものである。

Nicaise について

Édouard Nicaise (1838—96) は、パリの Laennec 病院で外科医として活躍する傍ら、医学史の探求に心血を注ぎ、多くの業績を残した。とくに、Guy de Chauliac (1890)、Henri de Mondeville (1893)、Pierre Franco (1895) らの著作を新たに編纂し、注釈書を作ったことが高く評価されて

いる⁵⁾。NicaiseによるChirurgia magnaの注釈書は、La Grande Chirurgie de Guy de Chauliac（以下Nicaise本とする）と題され、1890年にパリで出版された（図1）。

Nicaise 本の内容

Nicaise 本は、革装の四折判で、序論が188ページ

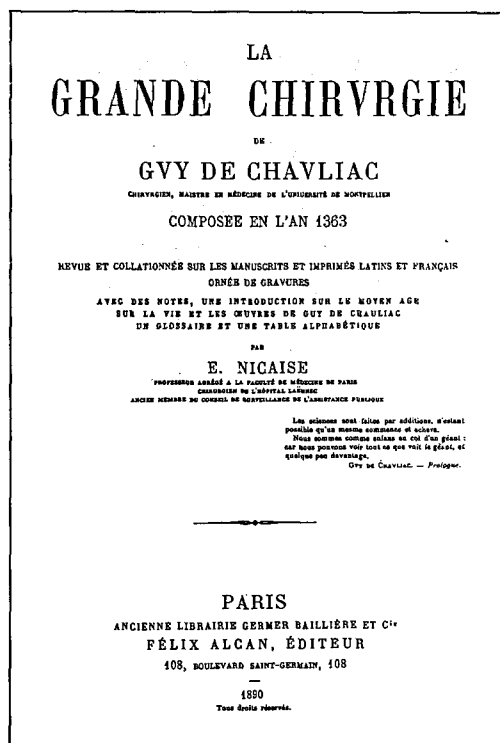


図1：Nicaise 本の扉

表1：É. Nicaise 著“La Grande Chirurgie de Guy de Chauliac”の内容

- A 序論
- I 科学的業績からみた中世
- II 14世紀以前の医学と外科学，Guyによって引用された著作者と著書にみる医学の学説
- III 14世紀の医学と外科学についての随想
- IV Guy de Chauliacの伝記
- V 14世紀から19世紀までのGuy de Chauliacに関する書誌学
- VI 証拠書類
- VII Guyの仕事に関する文献
 - B 大外科学（Chirurgia magna）
 - C 語彙
- I 薬物の語彙
- II 器械の語彙（図版付）
- III 解剖学，病理学，古いフランス語などの語彙

ジ，Chirurgia magnaのフランス語訳で，脚注付きの本文が667ページ，用語集が47ページ，外科用器具を一まとめにした図版が4葉，主な内容に見合った古い手稿を挿絵としたもの7図から構成されている（表1）。

序論の中で最も注目値するものは，14世紀から19世紀までのGuy de Chauliacに関する書誌（Bibliographie）（表2）で，Gueriniは「Nicaiseの注釈書は，ヨーロッパ，アメリカの図書館に所蔵されている34に及ぶGuyの手稿を参照して作られたものである」述べているが³⁾，それは，表2のA「大外科学（Chirurgia magna）の手稿」の部分の転載したに過ぎない。この他にも，Nicaiseは，表2にみられるように，多数の手稿や出版物が存在することを紹介している。また，印刷物のC「大外科学の注解と要約」の中にGuidonと呼ばれるものがあるが，これは，Chirurgia magnaの仏訳書を要約したもので，ギュイ（Guy）と案内書という意味のギド（guide，英語ではガイド）が語呂合わせされていて，ラテン語の知識に乏しかっ

表2：14世紀から19世紀までのGuy de Chauliacに関する書誌（É. Nicaiseによる）

手稿（1363～1478）

- A. 大外科学（Chirurgia magna）の手稿
 - I. ラテン語手稿 22
 - II. プロバンス語手稿 2
 - III. フランス語手稿 4
 - IV. 英語手稿 3
 - V. イタリア語手稿 1
 - VI. ヘブライ語手稿 1
 - VII. オランダ語手稿 1
- B. 大外科学の断片，注解，要約
 - 断片 7
 - 注解 4
 - 要約 5
- C. 小外科学（Chirurgia parva）
 - 手稿 6

印刷物（1478～1890）

- A. 大外科学の出版
 - 1. Nicolas Panis 版 3
 - 2. Symphorien Champier 版 4
 - 3. イタリア語版 3
 - 4. ベニスのラテン語版 8
 - 5. リヨンのラテン語版 6
 - 6. Tagault 版 1
 - 7. カタロニア語版 2
 - 8. オランダ語版 4
 - 9. Falcon 版 9
 - 10. Canappe 版 10
 - 11. L. Joubert 版 17
 - 12. S. Mingelousaulx 版 2
- B. 大外科学の断片
 - 1. 序章 6
 - 2. 解剖学 3
 - 3. 皮膚疾患について 1
- C. 大外科学の注解と要約
 - 注解
 - 1. G. des Innocens 版 3
 - 2. F. Ranchin 版 6
 - 3. Courtinによる注解 1
 - 4. 序章についての注解 1
 - 5. 第6分冊についての注解 2
 - 要約
 - 1. Guidon 22
 - 2. L. Verducによる要約 12
- D. 小外科学 5
- E. 大外科学の新版（1890年É. Nicaiseによる）

た床屋外科医の参考書として使われ、外科医としてよく知られた Ambroise Paré もこれで学んだという⁶⁾。

外科用器具について

Guerini の歯科医学史の中に引用されているので、前論文では省略したが、Chirurgia magna の第6分冊、第2教科、第2章、第5部「歯疾の一般用語（または、歯疾総論）」の中に、歯科専門家が歯科的疾患の治療に際して、用意しなければならない器具として、表3に示すような10種類の器具が挙げられている。しかし、その形状や使用法についての記述がないので、主に Nicaise 本の外科用器具の図版と解説を参照しながら、その姿を追ってみた。

1. (F)rasoirs カミソリ, (L)rasoriis (Fはフランス語, Lはラテン語の略, また, 日本語訳名の無いものは, 手許の辞書に見出し語がなかったものである)

rasoirs は, 英語でいう razor カミソリのことで, 刃物を表すと考えられる。Nicaise の図版には, 図2に示すように, A : Faucille(鎌型メス), B : Lancette, C : Rasoir の3種類に属する刃物が挙げられている。歯科用には, 図2の右側下から4番目にある細身の rasoir のように, 小さな刃のものが使用されたのではないかと想像される。

2. (F)rapes オロシガネ, ヤスリ, (L)raspatoriis 骨膜剥離器

rapes と raspatoria は, 訳名からみると全く異なったものである。これに相当すると思われるものは, 図版の中に見当たらないが, Guerini は, ヤスリのことではなく, raspatoria は scraper(スクレーパー, 掻く道具)であると述べている。scraper

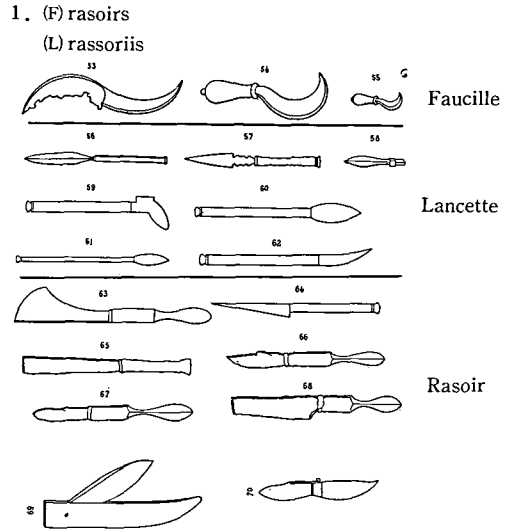
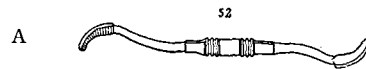
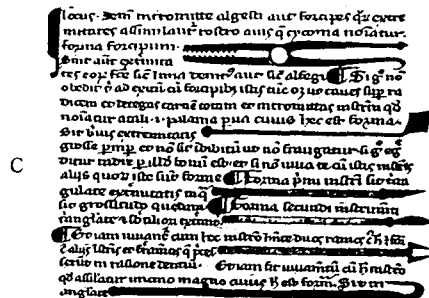
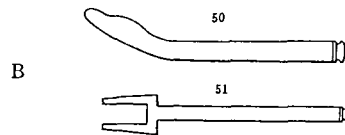


図2

3. (F) spatumes droits et courbes
(L) spatuminibus rectis et curvis



4. (F) esleuatoires simples, et a deux branches
(L) leuatoriis simplicibus, et cum duobus ramis



Albucasis の手稿から—エレベーター

図3

表3 : Chirurgia magna に記載された歯科用器具

1. (F)rasoirs 剃刀
(L)rasoriis
2. (F)rapes オロシガネ, ヤスリ
(L)raspatoriis 骨膜剥離器
3. (F)spatumes droits et courbes
(L)spatuminibus rectis et curvis
4. (F)esleuatoires simples, et a deux branches
(L)leuatoriis simplicibus, et cum duobus ramis
5. (F)tenailles dentelees 鋸歯状のヤットコ
(L)tenaculis dentatis
6. (F)esprouettes
(L)probis probo 試す
7. (F)cannules canule 管, カニューレ
(L)cannulis canula 套管, 小管
8. (F)deschaussours
(L)scalpris 小形ナイフ, ノミ
9. (F)tarières 穿孔機
(L)terebellis terebra 穴をあける道具, キリ
10. (F)limes ヤスリ
(L)limis ヤスリ

であれば、後出のスケーラーと考えられる。

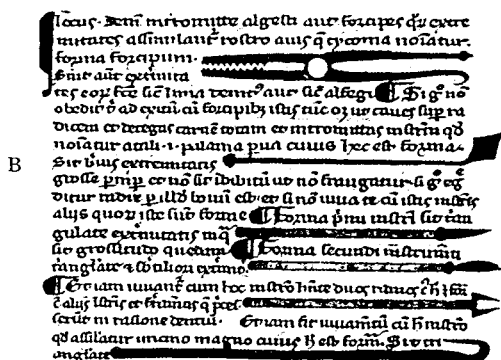
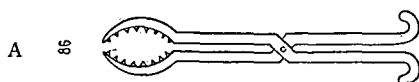
3. (F)spatumes droits et courbes, (L)
spatuminibus rectis et curvis

この見出し語は、手許の辞書に見当たらず、図版にも spaturnes はなかったが、Guerini は、spaturnes は 1 ないし 2 個の刃を持つ器具で、形態は多様であるが、一般には小さいものであると述べている。筆者は、これに似た用語 spatula (へら、匙器) から図 3 の A にある両頭の骨膜起子 (elevator) をこれに当ててみたい。

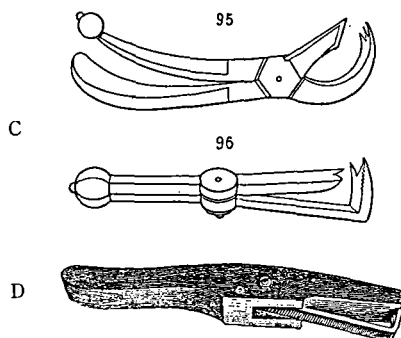
4. (F)esleuatorres simples, et a deux branches, (L)euatoriis simplicibus, et cum duobus ramis

単または二又のエレベーターで、Nicaise の図版の解説では、ともに抜歯に用いると書かれてい

5. (F) tenailles dentelees
(L) *tenaculis dentatis*



Albucasis の手稿から一鋸歯状鉗子



樽の箍を締める道具

图 4

る(図3のB)。図3のCは、Albucasisの手稿にあるエレベーターとされているが、中に二又のエレベーターがみられる⁷⁾。

5. (F)tenailles dentelees 鋸齒状のヤットコ,
(L)tenaculis dentatis

これは、Nicaise の図版にみられる鋸歯状鉗子 (図 4 の A) で、Albucasis の手稿にも同型の鋸歯状鉗子がみられる (図 4 の B)。Nicaise は、これは胎児の頭を砕くために用いるとしているのに対し、Hoffmann-Axthelm は、抜歯用であって、歯をしっかりと把握するために鋸歯状になっていると説明している⁷⁾。tenaille (鉗子) として他にもいくつか図示されているが、Nicaise は、形の小さいものは、抜歯にも用いられるとし、とくに、図 4 の C は抜歯用の tenaille であると解説している。前論文で述べたように、ここで、Joubert は、Paré の抜歯用器具の図版 (鉗子 1、ペリカン 3) をそのまま引用しているが、Nicaise 本では、逆に Paré が引用したこの鉗子とペリカンだけである。なお、ペリカンの力の働き方は、樽のタガを締める道具 (図 4 の D) の働きに似ているという⁸⁾。

6. (F)esprouuetes, (L)probis

ともに「試す」という動詞からきている用語で、Nicaise は、消息子であると述べている。この他、Nicaise の図版に、掘削用の消息子として、カニューレ状で水抜きのための消息子が図示されている(図5のA)。さらに、Nicaise は、Taste の名称で、図5のBのような消息子をあげているが、これは、傷の中に入り込んだ異物を探るために使用するという。歯科用としては、嚢胞の内容物や軟組織に迷入した異物の除去にでも用いたのだろうか。

7. (F)cannules 管, カニユーレ, (L)cannulis
套管, 小管

図6のAは、有窓カニューレといい、口蓋垂切除用のカニューレである。前論文に記載した

6. (F) esprouuetes
(L) probis

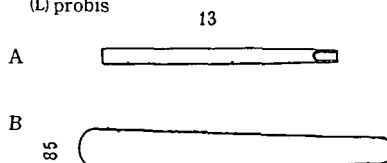


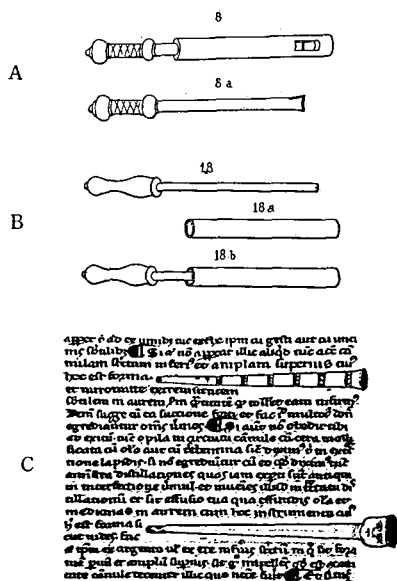
图 5

Joubert の図版と同じものである。図 6 の B は、焼灼用カニューレで、熱した棒を周囲組織を保護するための套管の中に挿入して焼灼する器具である。図 6 の C は、Albucasis の手稿にある焼灼用カニューレであり、図 6 の D は、15 世紀半ば頃の手稿にみられる、歯髄焼灼にカニューレを使用している図である⁷⁾。

8. (F) deschaussoirs 歯膜剥離器, (L) scalpris 小形ナイフ, ノミ

Guerini は、deschaussoir を歯肉メスであるとしているが、deschaussoir には、手許の仏和辞典に①歯膜剥離器②樹木の根の土を除く道具、という訳が付いている。①の歯膜剥離器は、意味不明

7. (F) cannules
(L) cannulis



Albucasis の手稿から一焼灼用カニューレ



15世紀半ば頃の手稿から一カニューレによる歯髄焼灼

図 6

な訳語であるが、②の訳語と考え合わせると、スケーラーではないかと想像される。図 7 の A は Albucasis の手稿にあるスケーラーであるが、なかにメス形のものもあるので、一層その感を深くする⁷⁾。Nicaise の図版には、両者とも記載されていない。

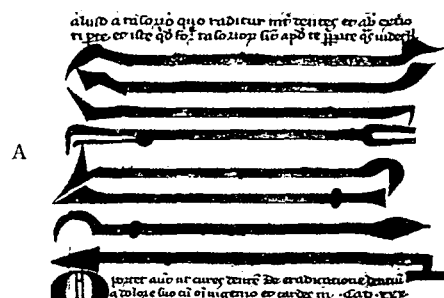
9. (F) tarieres 穿孔機, (L) terebellis 穴をあける道具, キリ

これは、trepan (穿孔機) のことで、Nicaise の図版には、図 8 に示すような形態のものが挙げられているが、これらは、みな骨用のものである。図 8 の下の 1 組は、尿道結石を砕くためのものであるという。このような細いものや小さいものが、歯の穿通や削去にもちいられたのではないかと考えられる。

10. (F) limes ヤスリ, (L) limis ヤスリ

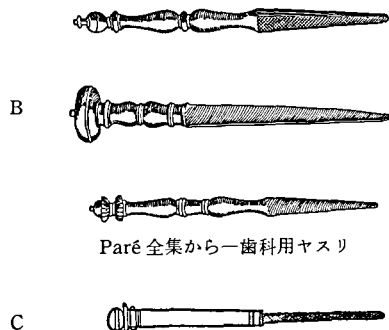
これも図版には載っていないが、当時の歯科用

8. (F) deschaussoirs
(L) scalpris



Albucasis の手稿から一スケーラー

10. (F) limes
(L) limis



Paré 全集から一歯科用ヤスリ

Albucasis の手稿から一ヤスリ

図 7

ファイルとしては図7のBとCに示したものが、使用されていたと想像できる。

Cuyが引用した古典の著作者

Chirurgia magna は、ギリシャ、ローマ、アラビア医学の著作の集大成に過ぎないという批判があるが、Guy de Chauliac が引用した古典の著作者の名とその回数は、表4の通りである。これと同じものは、Joubertの本にも掲載されている。Galen 890, Avicenna 661, Albucasis 175, Rhazes 161, Halyabbas 149, Hippocrates 120, Lanfranc 102, Roger 92, Aristotle 62 らが、引用回数も多く、良く知られた著作者である。

考 察

筆者が、さきに紹介した Guy de Chauliac における歯科学的記述は、Laurent Joubert のラテン語注釈書によるものであった。このたび、Chirurgia

magna の決定版といわれる Édouard Nicaise によるフランス語注釈書を披見したが、同書にある Nicaise が収集し、整理した Guy de Chauliac に関する書誌学をみると、その手稿、印刷物の類は、驚くほど膨大なもので、Chirurgia magna が、初めて印刷されたという、1478年を境に手稿と印刷物は、はっきり分けられている。手稿としては、Chirurgia magna の手稿が34点、Chirurgia magna の断片、注解、要約の手稿が16点、Chirurgia parva (小外科学) の手稿が6点である。印刷物としては、Chirurgia magna の出版が言語別、編者別に分けて計69点、Chirurgia magna の断片、注解、要約の出版が57点、Chirurgia parva の出版が5点となっている。

1478年に初めて印刷された Chirurgia magna は、Nicolas Panis によるフランス語訳で、リヨンで出版された。これが、前述の Guidon のもとになったといわれている。これらのことが、Nicaise の Guy de Chauliac に関する書誌学の中に細かく記載されていて、Joubert の編集によるものは、1585年のラテン語のもの(筆者が前論文で紹介したもの) 1点を除いて、すべてがフランス語の訳本で、共著のものを含めて合計17版にも及ぶという。

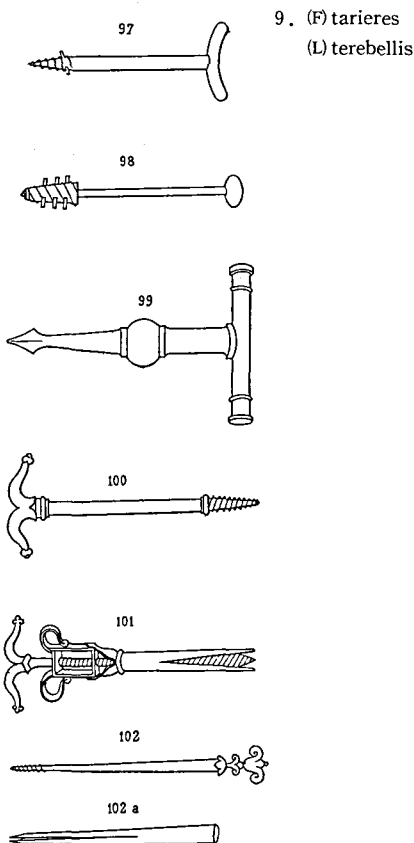


図 8

表 4 LISTE DES AUTEURS CITÉS PAR GUY DE CHAULIAC
ET DONT LES OUVRAGES SONT INDiquÉS CI-DESSUS¹

Acanamosé	12	Henri de Mondeville	68
Albert de Bologne	4	Héraclide Tarentin	1
Albucasis	175	Hermès	1
Albucasis	175	Hippocrate	120
Alcoatin	28	Hugues de Lucques	1
Alexandre	7	Jacques apothicaire	1
Un Alexandrin commentateur des		Jamier	36
Sectes	3	Jean Damascène	3
Ayméric d'Alais	7	Jean de Crepatis	1
Maître André	1	Jean de Saint-Amand	8
Anserin de la Porte (Simon de		Jean de Parme	1
Gènes?)	6	Jean Jacques	2
Apollonius	3	Jean, neveu d'Anselme	2
Archigène	6	Joannice (Johannitus)	2
Aristote	62	Jésus, fils de Haly	62
Arnaud	8	Jordau	2
Asclepiade	1	Isaac	1
Avenzoar	21	Lanfranc	102
Averroès	29	Macrobe	1
Avicenne	661	Mercadant	1
Diavenu	2	Mondin	6
Bernard de Metz	1	Nicolas Catalan	1
Betrucius	14	Nicolas prepositus	11
Bonet, fils de Lanfranc	1	Odete de Lyon	1
Brun	49	Ovide	1
Platearius	1	Maître Paul	2
Commentateur nouveau (Averroès?)		Paul Eginette	10
Jean de Saint-Flour	6	Philagrius	1
Pierre d'Albano	5	Pierre de l'Argentière	1
Orion	1	Pierre d'Arelata	3
David	1	Pierre de Bonant	15
Damocrate	1	Pierre de Dye	1
Démocrite	1	Pierre d'Espagne	6
Diocoride	2	Pierre d'Orliac	3
Dino del Garbo	36	Platon	2
Dondi	1	Ptolémée	2
Etienne Arnaud	1	Les quatre maîtres	23
Gaddesden	2	Rabbi Moysé	12
Galen	890	Raymond de Molieres	3
Gilbert	2	Razes	161
Gordon	20	Roger	1
Guillaume de Salicet	68	Roland	1
Halyabbas	149	Scrapion	9
Haly Rodan	5	Thadée Bolognais	4
Heben Mesue	61	Théodoric	85

1. Cette liste, avec le nombre approximatif des citations de chaque auteur, est faite d'après celle de l'édition de Joubert.

序論の中にある14世紀以前の外科学と医学の歴史や Guy de Chauliac の伝記などは、医学史の上からみても貴重な文献といえよう。

Nicaise 本の主文である Chirurgia magna の内容は、Joubert 本の内容とほとんど同じであるが、Nicaise 本が脚注であるのに対し、Joubert 本の注釈は、後部に一括されている。

外科用器具の図版についてみると、Nicaise 本と Joubert 本の両者に共通して収載されている器具が大部分であるが、Nicaise 本では Albucasis から、Joubert 本では Paré から引用されているためか、器具の一部に共通していないものが見受けられる。

ま と め

Édouard Nicaise による Chirurgia magna の注釈書から、Guy de Chauliac に関する書誌と歯科用器具について考察し、前論文に対する補遺としたが、Nicaise の注釈書が Chirurgia magna の決定版といわれる内容を備えた名著であることを知った。

稿を終わるあたり、終始有益なご助言を賜った松本歯科大学 橋口緯徳教授に深く謝意を表します。

付

Nicaise 本に挿入された図版について

Nicaise 本には、前述の外科用器具の図版の他に、口絵1と本文の内容に見合った挿絵6が掲載されている。いずれも14・15世紀の手稿の絵を図版としたもので、医学的にみても価値があると思われるので、転載して紹介する。

図9. Nicaise は、口絵として、「14・15世紀の講義室」と題されるこの図を使った。Hoffmann-Axthelm によれば、1461年の手稿にみられる中世の大学における講義風景で、Bernhard Gordon (注：1285年から1307年まで、モンペリエで講義を行ったスコットランド人医師といわれている) が1段高い教授用椅子に座り、書物をよんでいる。左側に小さく描かれているのは学生で、右側には Galen, Avicenna, Hippocrates が歩いている様子が描かれているという⁹⁾。

図10. 15世紀の講義風景。Chirurgia magna の

序章の前に置かれている。15世紀の手稿で、講義中の人物は、恐らく Guy であろう。

図11. Chirurgia magna の第1分冊「解剖」に配された、14世紀の解剖風景で、14世紀の手稿である。助手が執刀し、もう1人の助手が内蔵を探っている。教授は、書物を左手に持ち、右手の棒で、聴講する医師に説明しているところであるが、いろいろな面から興味深い図版である。

図12. 第3分冊「創傷」にある15世紀の手稿である。左側の3人が患者で、1人は左膝を押え、1人は眼に包帯して杖をついており、もう1人は左腕から血が流れている。診察しているのは、恐らく Guy であろう。

図13. 第5分冊「骨折と脱臼」に収められた15世紀の手稿で、腕と足を怪我した2人の患者を診察している風景である。

図14. 第7分冊「解毒剤(薬剤)」の中にみられる15世紀の手稿で、薬局の様子を表現したものである。左側の助手は製剤中で、右側の助手は戸外で薬草の手入れを行っており、中央の薬剤師がそれぞれに、指示を与えているところである。第7分冊にはさらに、「瀉血」の章に黃道12宮(獣帯)の図が掲載されているが、省略する。

文 献

- 1) 市川博保(1990) Guy de Chauliac の Chirurgia magna における歯科学的記述について。松本歯学, 16: 349-360.
- 2) Keil, G. (1976) Chirurgia magna Guidonis de Gauliaco. Wissenschaftliche Buchgesellschaft. Darmstadt.
- 3) Guerini, V. (1909) A History of Dentistry, 142-149. Lea & Febiger, Philadelphia & New York.
- 4) Nicaise, É. (1890) La Grande Chirurgie de Guy de Chauliac. Ancienne Librairie Germer Baillière et C., Paris.
- 5) Garrison, F. H. (1929) An Introduction to the History of Medicine. 595. W. B. Saunders, Philadelphia.
- 6) 森岡恭彦(1990) 近代外科の父・パレ, 157-158. 日本放送出版協会, 東京.
- 7) Hoffmann-Axthelm, W. 本間邦則訳(1985) 歯科の歴史, 106-116. クインテッセンス出版株式会社, 東京.
- 8) 同上137-138.
- 9) 同上127-128.



図 9



図10



図11



図12



図13



図14